

『リブッサ』 ——グリルパルツァーの黙示録——

阿部 雄一^{*1}

フランツ・グリルパルツァーの遺作には、『リブッサ』のほかに『ハプスブルク家の兄弟争い』と『トレドのユダヤ女』があり、それらには宗教と信仰、権利^{レヒト}=正義、19世紀のオーストリア社会という共通テーマがある。だが、各作品によって核心が異なる。『ハプスブルク家の兄弟争い』は国家形態と19世紀におけるオーストリアの生き延びる道を熟慮する歴史劇である。『トレドのユダヤ女』では個人の内面が探求され、自己実現への努力とその挫折が表現される。『リブッサ』の核心は人間とその世界の概略を描くことだが、どのように作品化されているのか、その戦略を探究し、それによって作者の思想を理解することが本稿の目的である。

グリルパルツァーは創世神話のリブッサ伝説を換骨奪胎する。第一幕でリブッサはプリーミスラウスと出会い、天上から境界を越え、人間の世界に入り込む。中間の第二・三・四幕で、人間社会の根本問題であるジェンダーを考察することを通して、母権制から父権制への移行が歴史の始まりであることを作者は示す。移行の契機となったのは、人々がおのれの「権利^{レヒト}=正義」を主張するようになり、女性支配の原理「幼子のような信頼」が保てなくなったことである。このような状況の下で、男性が実質的権力を握る有史時代に入るのである。

その始まりとして、プリーミスラウスはプラハを建設しようとし、リブッサが祝福を与えることになる。だが本来の霊力を取り戻すことによって、彼女は祝福を与えるのではなく、人間界にこれから連綿と続く悪夢の歴史を予言してしまう。その予言は19世紀から見れば過去の歴史である。その起点がカール五世の時代であるのは、グリルパルツァーにとって最も重大な歴史の転換点が宗教改革だからである。ルターの闘争によってキリスト教は人々の畏怖すべき慣習とならず、人々から畏怖の念が失われていった。畏怖の念が弱まるにつれ、人は上昇志向に冒され、人間としての幸福をやむことなく追求する。それが人間の運命である。そして、畏怖の念が失われてゆく過程がグリルパルツァーにとっての人間の歴史なのである。

最後に人間が「謙虚」を神とし、リブッサの時代に回帰する希望が語られる。それが実現可能か考えるのではなく、信じる必要があると、作者はさしあたり予言者の口を借りて語っていると思われる。このようにしてグリルパルツァーはリブッサ伝説を、人類の過去を振り返ることによって未来を予測し、先行き暗い人類がいつか最後に到達すべき行く先を示す黙示録に仕立て上げたのである。

..... キーワード

神話と歴史 母権制と父権制 権利^{レヒト}=正義 信仰と畏怖の念

1. はじめに——三つの遺作概観

フランツ・グリルパルツァー (1791-1872) に

は、遺作となった三つの劇作品がある。すなわち『リブッサ』(1848年完成)、『ハプスブルク家の兄弟争い』(1848年完成：以下、『兄弟争い』)、『トレドのユダヤ女』(1851年完成：以下、『ユダヤ女』)である。これらの作品は、残存資料から分かる限りでも、遅くとも作者が25歳から33歳の時に構想に着手しているので、完成までに

2013年9月30日受理

„Libussa“ – Grillparzers Apokalypse –

*1 Yuichi ABE

日本橋学館大学リベラルアーツ学部

24年から35年もの間、熟成させていたことになる。しかもいずれも完成からさらに20年以上を経て、作者の死後、ようやく出版され初演された。これらの作品を脱稿した後には、断片の秀作はあるものの完成戯曲はないので、思想においても作劇法においてもこの三作品を作者が最後に到達した境地と見做してよいだろう。

『リブッサ』は、他の二作品が生前に公表されたことがなかったのに対し、第一幕のみではあるが1840年に上演されており、後年、この第一幕を作者自身が自分の書いたものの中で最も秀逸な出来栄と評した。⁽¹⁾ その一方で、第一幕以外の部分についてはこう述べている。『リブッサ』は第五幕がうまく出来ませんでした。第五幕も第一幕と同じように立派なものにしなければならなかったのですが、それに、中間の各幕も演劇的に立てた方略のため、悲劇の範疇から外れるものになってしまいました。こうしたことが、作品を筐底にしまうことにした理由、少なくとも私にとってのいくつかの理由のうちで一番強い理由です。変えなければ、改善しなければという義務感はありませんが、もう無理なのです。⁽²⁾

第五幕の後半はほとんどリブッサの一人語りである。グリルパルツァーはかつて『メデア』（1821年初演）の最終場面を、エピローグの形でほとんどヒロインのモノドラマにしていた。『リブッサ』のフィナーレも体裁はエピローグであり、それまで進行していた筋とかろうじて連続しているものの、リブッサの憑依的予言という性質上、作品のまとめにはなっていない。このエピローグらしくないエピローグは人間存在の総括を内容としており、ほとんど一本の朗読劇——というには短すぎ、エピローグというには長すぎる——として独立させうるほど完結性が高い。だが、フィナーレに筋の流れを裏切る思いがけない展開を置くのは、ゲーテ時代から約20年を隔した新たな時代の革新的試みと言うこともできるだろう。

グリルパルツァーの作品は、粗筋を手掛かりに作品を通覧しても作者の意図が必ずしも見えない

ことがある。遺作のどの作品においても、作者は粗筋に対する裏の筋あるいは裏の意図を忍ばせている。『リブッサ』では後述するように、男女の葛藤が、神話から歴史への移行と並行しており、『兄弟争い』では、物語の筋が作者の生きていた現実と対比的に進行する。また『ユダヤ女』では、外見は男女の愛欲を演劇的に描きつつ、その実、個人の内面を探究している。⁽³⁾

三つの遺作が題材としたものは様ざまである。『リブッサ』はボヘミアの8世紀ころとされる創世神話から人間の歴史に移行する過渡期を描き、『兄弟争い』は1600年前後に神聖ローマ皇帝がルードルフ二世からマティアスに代わり、三十年戦争という破局に突入する危機的状況の物語である。『ユダヤ女』は、12世紀末のスペインがムーア戦争を目前に控えているにも拘らず、ユダヤ女に対する激しい恋を抑えられない王が主人公である。前述したとおり、たしかにグリルパルツァーの作品は筋を追うだけでは、作品の意図がほとんど見えないと言ってよい。だが逆に、どれほど改作されようとも、題材が作品の力点を規定し、また逆に、作者が書きたいテーマを乗せうるいれものを求めた結果として、それぞれの題材が選ばれる。この双方向の要求と反応が噛み合っ初めて、少なくとも作者にとって納得できる作品が完成に至るはずである。

三作品に共通する主なテーマは、宗教と信仰、権利^レ正義、19世紀のオーストリア社会である。しかし、題材によって当然それらの濃淡は異なり、重心も移動する。『ユダヤ女』における個人の内面と人間のあるべき姿の探究、『兄弟争い』における国家形態についての熟慮と19世紀のオーストリアの生き延びる道をめぐる模索、それらがそれぞれの作品の最重要のテーマだった。そして、『リブッサ』では人間とその世界の概略を描くことによって、人間の宿病とその由来を剔抉することが眼目だと言って差し支えないだろう。端的に言えば、伝説ではブラハを建設したのはリブッサだが、グリルパルツァーはそれをプリーミスラウ

スに変えることによって紛れもない彼独自の劇作品に仕立て上げてゆく。本稿ではグリルパルツァーによるこうした作品化の戦略を探究してゆきたい。そうすることによってはじめて、作者が作品に籠めた思想を理解することができると考えるからである。

2. 女と男、神話と歴史

リブッサはチェコ民族の創世神話の主人公である。人望篤い統治者の父と妖精の母から生まれた三姉妹の末娘で、父の死後、その地を治め、プラハの町を建設したとされる。その夫プリーミスラウス（チェコ語：プシェミスル）からボヘミアのプシェミスル朝が始まり、有史時代に入る。この王朝は13世紀後半、ハプスブルク家出身初の神聖ローマ皇帝ルードルフ一世と戦って敗死するプシェミスル・オタカル二世——グリルパルツァーの史劇『オトカル王の幸運と最期』（1825年初演）の主人公——に至るまで栄華を極める。

グリルパルツァーは、このリブッサ神話を換骨奪胎する。三姉妹は母から受け継いだ霊力を持つ、半ば天上の存在である。危篤の父のために薬草を探しているうちに溪流に流されたリブッサは、農夫プリーミスラウスに助けられ、彼の亡き姉（あるいは妹）の形見の服を着せてもらう。この二つの出来事によりそのとき、世界を一つに完結している全体として捉える高所から降りて境界を越え、「なすべきことが多く、個別にあれこれと事を片付けるとき、全体のつながりを見失」（V. 2461-63）⁽⁴⁾ ってしまう人間の世界に入り込んでしまう。それは、プリーミスラウスという人間に惹かれたことと民衆の服の暖かさにより、人間に好意を抱いたからである。

別れを惜しむプリーミスラウスは追憶の証拠として、リブッサを助ける際に壊れたベルトの留め金を盗み取り、鎖の部分のみを繋げて首飾りとして、別れ際にリブッサの首に掛けてやる。不思議なことにリブッサはそれをまったく訝しく思うことなく別れる。境界を越えたためか、あるいは何か別の理由があって、半ば夢うつつの状態だった

のだろうか。理由はついに不明のままであるが、少しあとで姉カッシャに譴責されたとき、「あの人の子だ」と傍白することから、首に掛けられたとき、それが本来ベルトであったものだということをリブッサが認識していないのは確かである。このベルトのモチーフをめぐって、リブッサとプリーミスラウスのかけひきが第三幕と第四幕にわたって延々と続けられる。長くなった理由は、このかけひきが、表向きは男女が愛を確かめ堅固にするためのものであるが、単にそれだけのためではないからだ。

人間社会の根本を究明するには男女の社会的役割分担、すなわちジェンダーを考察することは避けて通れない。すなわち、国母的なリブッサによる、信頼と優しさを支配原理として行われていた神話的女性支配から、プリーミスラウスによる、功利主義が趨勢となる男性支配に移行することに、作者は歴史の始まりを見るのである。二人のかけひきは、母権制から父権制に社会が移行する過程を女と男の特性および両者の関係性に絡めるために——つまり、なぜ男女の葛藤の過程を経て、人間の歴史が始まるのかに関して、グリルパルツァーが自らの解答を示すために——仕組まれている。

そして人間の歴史を起源から終末まで俯瞰するのがエピローグのリブッサの予言である。だが、エピローグの始まり方に唐突な感があることは否定できない。リブッサは、プラハの建設を始めるにあたってプリーミスラウスの要請を受け、祝福を与えることを一旦は拒否するが、翻意して人間の役に立つために祝福しようとする。だが今度は逆に、リブッサの体を氣遣って、プリーミスラウスがあくまでもこれを阻止しようとする。すると、リブッサは「足をドシンと踏み鳴らして」（V. 2250ト書）強引に意志を押し通し、予言を始めるのである。ただし、先述したように19世紀のちょうど半ばの作品であり、作者の出発点であった古典主義もロマン主義も過去のものとなっていたことを顧慮すれば、急激に状況を転換するという斬新な構成を意図的に試みたとも考えられる。

また、作品構想を始めたときすでにリブッサの

予言ありきで、終幕をカッシャの「高きものは去りました」(とは裏を返せば「低き人間の歴史が始まる」)という一行で終わらせようとしたとも推測される。⁽⁵⁾ この終幕と、リブッサとプリーミスラウスの出会いという第一幕冒頭の枠の中で、途中経過において二人の愛と憎しみ、協調と齟齬の関係を恣意的にではなく自然な流れの中で生み出すために、第二幕から第四幕までの長さを要したことになる。

リブッサは父の死後、その権力を受け継いだのであるから、筋として表現される外見と相反して、グリルパルツァー劇は創世神話とならず、リブッサを、時代を変える大変革をなし、新たな政治体制を布く女性支配者として描く。旧体制の支配層だった三人のヴラディーケ(伯爵に相当する称号)は先王であるリブッサの父に仕え、「効き目のある賢き軔」(V. 428)にかけられていたというから、それは絶対主義の時代であったことになる。それに対して第二幕で現出するリブッサの時代は、伝説に合わせて太古の母権社会を映したものと見せかけているが、描かれるのは現実にはありえない理想郷である。行政や民衆の監督を腹心のヴラストに任せ、リブッサ自身は実権を持たない君主である。「幼子のような信頼」(V. 445)を支配原理として彼女は、愛、平等、人権をスローガンとし、平和・非暴力を謳う憲法を自ら体現し、貧富の差を撤廃した原始共産社会を実現する。

一方、リブッサとプリーミスラウスは、再会しないうちに離れたまま予め心を通わせ合う。すなわち、失った留め金を取り返す目的と、心惹かれるプリーミスラウスがどれほどの器量の者かを確かめるため、リブッサは策略をめぐらす。それに対してプリーミスラウスは知略をもって応酬する。そして、リブッサはその賢明さと高潔さに感じ入るのである。

リブッサの社会において、善意ばかりの平板な日常に人は飽きる。「満足を知るのは動物と賢者のみ」(V. 2058)で、人間の欲望には果てがない。おのれの「権利^レ正義^ト」をあくまでも要求する

者が現れる。それに対して、リブッサが答える。

この国の言葉が名づけるすべての言葉の中で、権利という言葉ほどわたくしにとって厭わしいものはありません。そなたの畑に実が生るのはそなたの権利ですか。今この時、そなたが倒れて死なないのは、命と息に対するそなたの権利ですか。すべての人々のために全世界を満たしてくれるすべてのものは、わたくしの目には、どれもこれも恩寵や慈愛にほかなりません。なのに、ちっぽけな人間が権利だ正義だとのたまうのですか。そなたが貧しい人を助け、兄弟を愛することはそなたの正義、と言うより義務です。正義というのは、この世が孕むあらゆる不正の代わりに言う美辞麗句でしかありません。そなたたちの目を見れば、どちらが騙しているか読めます。けれどわたくしが申せば、証拠を求められます。けれど正義や証拠などというのは、ゆがんだ者みな、それに支えられて足を引きずって歩く二本の松葉杖です。和解なさい。さもないと、係争地を没収して、アザミとイバラの種を蒔かせます。題して「ここに正義住めり」。(V. 897-915)

「権利^レ正義^ト」に対置されるのは天からの恩寵や慈愛である。つまり、「権利^レ正義^ト」は人間のエゴイズムによるものなのだ。⁽⁶⁾ こののち、権利を守ってくれる男を待望する声が強くなる。各人各様におのれの「権利^レ正義^ト」を主張するとき、人間社会はもはや、社会の基礎を「信頼」に置くリブッサの手には負えないものになる。グリルパルツァーの考える人間社会の歴史は皮肉なことに、「二人の者に二通りの正義を捏ね出」(V. 451)すことにより、突破口が開けたのである。現実主義に徹して冷厳な英断を下せる男性が支配者になることが必要となり、その候補者としてプリーミスラウスが召喚される。

だがそうは言え、なぜリブッサは、創り上げた理想郷をやすやすと諦めて壊すことを容認するのか。第三幕の終わり近くで、リブッサはプリーミ

スラウスに向かってこう語る。

裁判官が求められています。その決することとは、何が善にして正当か、何が敬虔にして賢明かではありません。実際は泥棒や悪人であったとしてもそう呼ばれることなく、銘々がどれだけ取れるか、どれだけ拒否できるか、そういう権利を決することのみなのです。(V. 1324-28)

信頼に基づく善悪の判断が不可能になってしまうと、権利や正義、法——ドイツ語で言えばいずれも「レヒト (Recht)」——という松葉杖に頼るほかなくなる。そしてそれが人間をゆがめてしまう。言い換えれば、人間は有史以前の神話の世界から歴史の時代に移るに伴ってゆがんでしまった。つまり人間は宇宙と一体の全一な存在ではなくなり、理想郷を維持できなくなったからこそ、「権利^{レヒト} = 正義^ト」が必要になった。したがって人間の歴史において「権利^{レヒト} = 正義^ト」はつねに、人間社会を存続させるための必要悪だということになる。

こうしてプリーミスラウスがリブッサの宮廷に連れてこられ、プリーミスラウスが裁判官として立つ男の資格があるか試され、翻って必然的にリブッサも王としての女の資質を問われることになる。プリーミスラウスとリブッサは本来の神話では、対立関係ではなく、国づくりのための理想的な男女の組み合わせとして形象化されたはずである。だが、グリルバルツァーは 19 世紀のオーストリアに生きる男性として、リブッサ劇の中で女性をめぐる考察を行い、それと並行して神話的な女性支配から人間の歴史を刻む男性支配に移行することの必然性を解き明かそうとする。

それを考察するため、この戯曲では第三幕と第四幕において、リブッサとプリーミスラウスが直接向き合って、それぞれが自分の誇りを賭けて、相手を自分の精神的領域に引き入れるために闘う。1831 年の作品メモには「感情世界と理性世界の対立、黄金時代と分別ある秩序の対立が問題なのだが、全体として、男が女より優位に立っている

ことをめぐる確執が前面に立つ」⁽⁷⁾と書かれている。この作品で作者がすべてを繋ぐ媒体にしたのは女と男の資質の違いであり、それが女性支配と男性支配に対比される。リブッサは、そもそも自分の描く理想を人間社会において実現しようとして果たせず、自分の不得手な職務を託すためにプリーミスラウスを呼んだ。だが女王としての権威を保持し、彼を臣下として処遇しようとする。プリーミスラウスは反発するのではなく、敬意を示しつつも対等な立場でものを言い、高潔な本心を誠実に吐露することが徒となってリブッサの不興を買う。このような設定にしたのは、作者が男女に関する持論を披歴するためである。第四幕のプリーミスラウスの科白を見よう。

権力は力がものを言う。男はその本性からして権力に熱中するが、女は優美にできているから、余計なものを何であれ付け加えれば、価値が下がってしまう。美というものは、いかに華美に着飾っても緋色の衣や異国の絹で装っても、一枚一枚脱がされるにつれて美しくなり、本当の美そのものになってゆく。そして美は、最後に寛ぎの白に行き着き、おのが宝を意識して震えながら、最高の勝利を寿ぐ。それが女という、美の可愛い娘だ。力を持っていながら、保護も必要とする間の子^{あい}。弱さに打ち勝つ力を持って、女は女として最高のものとなりうるのだ。要求しないものが女に与えられ、女が与えるものは天的な贈り物となる。なぜなら、天が要求するのも、ひたすら与えることを通してなのだから。だが高慢がこの優しい混合物に混じると、純粋な牛乳にきつい酒が入るように、成分が分解して、強さと弱さ、甘さと苦さに分離し、評価できないものが評価され、比較できないものが比較されるようになる。(V. 1638-61)

女性は、男性と違って天から与えられた素のままが一番良い。したがって、自然と一体の神話世界が終わり、「権利^{レヒト} = 正義^ト」的思考がものを言う権力闘争の時代には、社会の表舞台に立つべきで

はないと示唆している。他の個所でプリーミスラウスが、「男の領主は自分が選んだ妻を輝かしい存在にするが、女王は選んだ男を位は家臣に抜擢しても、ただの夫に格下げしてしまう」(V. 1025-27) と言うのも裏返しの表現である。女は女であるだけで輝くが、女の下にいる男は情けない存在に成り下がってしまうから、社会的役割分担として男が上に立つほうが自然だという論法である。

しかしそうすると、プリーミスラウスを司法と行政の長に任命するのがほかならぬ女性のリブッサであることは作者の主義に反する。だが、この矛盾を解決してみせる策略としてグリルパルツァーは、第四幕の終わりから第五幕の前半まで、人類の見果てぬ夢のような男女合一の姿を垣間見せる。すなわち、プリーミスラウスが現実政治を受け持つ一方、リブッサは民衆の象徴、あるいは憲法のような精神のような漠とした元首的存在であり、かつプリーミスラウスが立てた施策を最終的に承認する役目を担っている。別言すれば、先に引用したプリーミスラウスの科白と矛盾することなく、男は人間界の長として、女は人間界にあって別格の天上的な存在として、互いに満足のゆく形で役割分担したとすることができる。

しかしその幸福な時期も長く続かず、歴史の容赦ない展開の前に終わるのはなぜか。それは二人の蜜月が神話から歴史への移行期間だからである。歴史の始まりは神話の終わりであり、神話の終わりはすなわちリブッサの死を意味する。人間の至福は続かないのだ。それはグリルパルツァーのペシミスティックな人間観や歴史観の現れと見てよいだろう。

チェコが国家として力強い一歩を踏み出すためにプラハを建設するにあたって、世俗の権力によるばかりでは求心力が足りないので、弾みをつけるためにプリーミスラウスは高次の権威づけを要求する。しかも皮肉なことに、リブッサに祝福を要求するプリーミスラウスにとって、本来のリブッサがしていたことや姉たちが今もしていることは「不毛な瞑想」(V. 2178) に過ぎないにも拘らず、

である。この齟齬は、リブッサが自然としての人間を代表し、プリーミスラウスが実利的な人間社会の現実を代表しているがゆえに生じる。その結果、人間が、施策の権威づけをしてもらおうとしても、「超越的なものは機能化されない」(ロルフ・ガイスラー)。⁽⁸⁾ つまり、「高きもの」(V. 2513= 最終行) は人間の思い通りの道具にはならないのである。それゆえ、リブッサは歴史の記念すべき第一ページを祝福するはずであったが、全く期待外れなことに、そして自らの意(「民衆のためになることをするのがわたくしの務め」V. 2248) にも反して、人間の出鼻をくじくような、人間界にこれから連綿と続いてゆく悪夢の歴史を予言してしまうことになる。

3. リブッサによる人間の歴史の総括

第五幕に入ると、長老たちと土地を検分してきたプリーミスラウスが、リブッサの許に戻って来て、町を建設し、そこをプラハと名づけたいと言う。だがリブッサは、壁で囲まれてしまったら、人間にとって宇宙の霊との一体感が弱まってしまうのではないかと、異を唱える。プリーミスラウスは、人間の欲望は際限ないものだと言って現実主義に徹し、いかにしてチェコ民族を富ませ、いかに他民族と伍してゆくかに議論を集中させる。こうした人間のナショナリズムや功利主義への志向をやむをえないこととして、仕方なく承知するリブッサは、プリーミスラウスの要求に応えるべく、プラハ建設が天から了承されたしるしとして祝福することになる。以下は、彼女の長大な科白(V. 2314-2505: ただし、他の人物も途中でいくらか口をはさむ) の大略である。

私(リブッサ)は羊飼いのように人間を守ってきたが、人間は知恵の実を食べ、楽園を自ら出て行くので、私は人間を諦めざるをえない。それから国が造られ、拡張政策がとられる。神々も伸び広がり、一つになって唯一神となる。すると隣人愛は失われ、憎しみばかりになる。信仰は感情によるものであるのに、頭で考えるも

のになり、人々は憎み殺し合うようになる。その争いがようやく終息すると、みな専横なふるまいに取り憑かれ、自分の中に神がいてしまう。かくして見知らぬ海に船を出し、世界を貪り、世界に貪られる。戦いは、剣に代わって欺瞞と謀略によって行われる。高貴なものは消え、低劣野卑が自由を詐称し、怪しげな妬みが平等を気取る。そのスローガンは「特権的なものすべてに戦争を」である。すると、神々から贈られる感激、信仰、信頼は浅薄な世界に向かわなくなる。虚無の中ではどんな力も無駄なことで、作用し合うこともなくなってしまう。

あなたたち（チェコ民族）は自分たちの時代が来るまで忍耐強く待つ。というのは、これからこの大地ではすべての民族が順に檜舞台に上がるからだ、神聖ローマ帝国、スペイン王国、フランス王国、大ブリテン王国という具合に。それからドイツ民族が輝き、⁽⁹⁾ ついにあなたたちが支配する時が来るが、幅や奥行はあっても、高さも深さもないし、力も借りものでしかない。⁽¹⁰⁾

（このあと、二人の姉が登場し、この地にはもう住めないから出て行くといい、リブッサになぜ人間とつながったのかと問う。リブッサは最後の力を振り絞ってそれに答える、彼らを愛しているからだ、私の命と心のすべては人間の近くにいて本当の姿になれるのだと。）

人間は善である。ただ、個々になすべきことが多いゆえに、全体とのつながりを失ってしまう。上昇志向をもってさかしらに思案するとき、彼らの人生の導きの星はゆがんでいるのである。こうして先へ進んでゆき、人間の力が極限まで達すると、心のうちに空虚を感じる。だが、騒音がやわらぐと、胸のうちに新たな声が聞こえてくる。欲求の対象を愛する愛でなく、愛そのものを欲求する愛だ。それから、今過ぎ去ろうとしている、予言者と超能力者の時代が再び来る。大地は天の高みにまで昇り、神々が再び胸に宿る。その神々の支配者にして唯一者の名は「謙虚」⁽¹¹⁾ と呼ばれる。

リブッサ伝説は一国の始まりの物語で、それがグリルパルツァー作品においても物語の筋の基層をなしている。表面上、このレベルでリブッサの祝福は語られるので、未来を予言する形を取る。だがそれが取りも直さず、作者の時代を映す内実の層から見ると、人間のこれまでの歴史を振り返る形になる。大略の第二段落にあるとおり、その起点として神聖ローマ帝国の、おそらくカール五世の時代かその前を想定していると思われる。なぜそこを起点とするのか。たとえば、「グリルパルツァーが理想化したのは、中世的要素を保持した国家概念であり、実質なき権力と神の秩序の体現を二つの柱にした国家であった」⁽¹²⁾ というクラウディオ・マグリスの判断を是としたい。破滅的局面の到来を押し止めるため、無為をよしとする『兄弟争い』の主人公ルードルフ二世と同様、リブッサもまた「実質なき権力」の体現者である。また何を措いても守るべき「神の秩序」はグリルパルツァーの思想の根幹をなしており、『兄弟争い』や『ユダヤ女』においてもくりかえし言及されている。⁽¹³⁾ 先に引用したリブッサの「^レ権利＝^ヒ正義」を糾弾する科白からすれば矛盾を孕むが、男性支配の、自然から乖離してしまった人間社会にあっては、社会秩序を維持するためばかりでなく神の秩序を遵守するために「^レ権利＝^ヒ正義」が、いかに不十分なものであろうとも、代替すべきものがないゆえに絶対に必要なのである。⁽¹⁴⁾

中世が終わるのはまさにカール五世のころであり、その同時代人ルターの宗教改革が、時代が大きく変わる契機であると同時に、グリルパルツァーにとっては歴史上最大の決定的な転換点である。宗教改革によってヨーロッパという一つなるキリスト教世界は大きく分裂することになる。「ルターの宗教改革は——宗教戦争が、殊にドイツで行われたものがもたらした禍を顧慮すれば——〔……〕性急だった。〔……〕彼は闘争を引き起こしたが、それによってとりもなおさず、——畏怖すべき慣習こそが宗教を、教養のある時代のための恩恵にしてくれるのに——キリスト教が徐々にこの畏怖

すべき慣習になってゆくのを妨げてしまった。」⁽¹⁵⁾ ルター以前の人々にあったであろう「全体的なものとの一致を求める宗教的憧憬」⁽¹⁶⁾ は、リブッサも「(人の) 宇宙の霊との一体感」云々 (V. 2020-23) といった言葉で重視する点である。信仰は感情に依拠するものであり、純粋に神を思い祈ることが本然である。だが、ルターは信仰の本来の姿を、闘争を持ち込むことによって壊してしまったとグリルパルツァーは考える。『リブッサ』においてもカッシャが「さまざまな意見を結び合わせるものが唯一のもの、それは理屈に頼らぬ畏怖の念です」(V. 1190) と語る。人の拠り所となり、社会を平穏に保つ畏怖の念が失われてゆくにつれて、人の心はさかしらな上昇志向に冒され、歯止めなく人間としての幸福を追求してゆく。それが人間の運命だということになる。グリルパルツァーにとって人間の歴史とは、宗教性が根底にあるのであり、端的に言えば、ほかならぬこの「畏怖の念」が失われてゆくペシミスティックな過程なのである。

4. むすび

「人間は善なのです」(V. 2458, 2461) と二度くりかえしてリブッサが断定するのは、グリルパルツァーの根拠のない願望だろうか。あるいは単にリブッサの高揚した感情の表出に過ぎないのか。作者は、欲望がもうそれ以上には欲求できないほどの極限にまで達したとき、欲望とは無縁の愛が生まれると信じているのだろうか。あるいは、最後には最初に戻って、地上が樂園となり、「権利 = 正義」は解消され、「天の秩序」が行われ、リブッサ = 神話の時代が回帰するとほんとうに信じているのだろうか。こうした疑問に首肯するのは困難である。回帰するとしても、真偽を疑い思案するのでなく、信頼と信仰に生きることができるようになるまでには、人間の尺度では測りえない年月を要する。作品は判断を曖昧にしたまま終わる。カッシャが、「あなたたちがこれまでより祝福に価するようになるまで」妹を旅に連れて行く (V. 2510f.) と言うとき、あるべき「謙虚」

(V. 2589) という名の最高神をおしいただき、信じることが求められている。人間の惨憺たる歴史に絶望したうえで、さしあたり予言者の言葉を通して後世に向かってかすかな希望がこめられるのである。

「謙虚」と訳した《^{デームート} Demut》とは何か。一般的なドイツ語辞典には「必然を理解し、与えられたものを受け入れようとすることによって身を任すこと、服従すること」⁽¹⁷⁾ と説明されている。この文脈において人が身を任せ、服従する対象は特定の個人や世俗の権威・権力ではなく、宗教や神である。リブッサの時代が回帰し、人間が祝福されるためには、理屈ではなく、ひたすら祈り信じるのが説かれている。この不可能を全うし、「謙虚」を神とし、「幼子のような信頼」に身を委ねることができるようになったとき、欲望ではない「愛」が生じる。グリルパルツァーはリブッサ伝説を、人類の過去を振り返ることによって未来を予測し、先行き暗い人類がいつか最後に到達すべき行く先を示す黙示録に仕立て上げたのである。

注

- (1) Dichter über ihre Dichtungen. Franz Grillparzer. Hrsg. von Karl Pörnbacher. München (Heimeran) 1970. [以下、DüD] S. 225.
 - (2) DüD, S. 225f.
 - (3) 青春期に享樂的人生を送る余裕がなかったために、壮年期に至ってようやく女そのものともいふべき女に出会った王は、運命的に愛欲に溺れざるをえない。だが管見では、劇の大半を王が見たユダヤ女の夢として作品構造を捉えることができ、そのように見ると、この愛人とは実は王のアルター・エゴであり、愛欲生活とはアルター・エゴである自己を深く知り、自己実現するための模索だと理解できるのである。
- さらに『ユダヤ女』に関する拙論では、作品の中で四つのレベル——歴史絵巻レベル、社会批評レベル、人生 = 夢レベル、哲学レベル——が平行したり交錯したりしながら、最後の一行に収斂していることを論じた。Vgl. Yuichi Abe: „Ein Traum nur einer Nacht“, den Alphons träumt. Über die mehrschichtige Struktur von Franz Grillparzers *Die Jüdin von Toledo*. 日本独文学会『ドイツ文学』第143号 (2011)、103-116頁。

- (4) 『リブッサ』からの引用は Franz Grillparzer: Werke in sechs Bänden. Hrsg. von Helmut Bachmaier. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1987, Bd. 3 (Dramen 1828-1851), S. 275-371. に拠る。同書からの引用は本文中に行数のみを示す。ちなみに原典はブランクヴァースによって書かれている劇詩であるが、本稿では詩形式で訳さないことを付言しておく。
- (5) Vgl. DüD, S. 217. 資料として残っている最初の構想に、リブッサの死が記されている。
- (6) 日記 3500 番、1839 年、参照。Franz Grillparzer: Sämtliche Werke. Historisch-kritische Gesamtausgabe. 42 Bände. Hrsg. von August Sauer u. Reinhold Backmann. Wien (Gerlach u. Wiedling; seit 1916: Schroll) 1909-48. [以下、HKA] Bd. 10, S. 292.
- (7) DüD, S. 222.
- (8) Rolf Geißler: Ein Dichter der letzten Dinge – Grillparzer heute. Wien (Braumüller) 1987, S. 130.
- (9) 科白は、いまだ存在せず、いつか成立する国名や民族名を語らず、場所で暗示しているのみなので誤解される恐れがある。一つめの国（「ポー川のほとりやアルプスの麓に住む民」V. 2406）を古代ローマにしまうとあとがつたがなくなる。Vgl. Oskar Seidlin: Prag: deutsch-romantisch und Habsburgisch-Wienerisch. In: Austriaca. Beiträge zur österreichischen Literatur. Festschrift für Heinz Politzer zum 65. Geburtstag. Hrsg. von Winfried Kudszus, Hinrich C. Seeba u. Richard Brinkmann. Tübingen (Max Niemeyer) 1975. S. 202-229, hier S. 227.
- (10) グリルパルツァーはオーストリア帝国の各民族を部族としてしか捉えていなかった（Vgl. Franz Grillparzer: Selbstbiographie. In: Ders.: Sämtliche Werke. Hrsg. von Peter Frank u. Karl Pönbacher. 4 Bände, München (Hanser) 1960-65, hier Bd. 4, S. 129.）から、チェコ民族が独立し、ほんとうに世界あるいはヨーロッパの中心になる日が来ると思っていたとは考えられない。むしろそのときは全世界が完全に平均化したときで、チェコも他の強国に屈さなくてすむようになるということではないか。そうだとすればそれは少しあとに語られるように、リブッサの時代への回帰であり、原始共産社会が再び現れるときである。ちなみに、リブッサの時代が戻ってくる、というのは
- グリルパルツァーの視点ではなく、リブッサが死の陶酔のうちに語っているとする意見もある。Vgl. Dieter Borchmeyer: *Libussa*. Grillparzers Mythos vom Tod des Mythos. In: Franz Grillparzer. Historie und Gegenwartigkeit. Hrsg. von Gerhard Neumann u. Günter Schnitzler. Freiburg im Breisgau (Rombach) 1994. S. 59-122, hier S. 68.
- (11) 引用に用いている作品集の編纂者パッハマイヤーによる語釈をここに引用する。（Franz Grillparzer, Anm. 4, S. 750f.）「自己限定を要求するものとして、『謙虚（Demut）』は最高に価値あるものになる。この語の異同には、『最高の』神性を意味するいくつかの表現が伝えられている。それは、新しい時代における人間の行為を規定する理念を決めることが、グリルパルツァーにとっていかに困難であったかを示すものである。異同は以下のとおり。＜人道 Menschlichkeit＞＜予感 Ahnung＞＜靈魂の平安 Seelenfriede＞＜謙虚 Demut＞＜自己制限 Selbstbeschränkung＞＜服従 Unterwerfung＞＜共感 Mitgefühl＞＜人間性 Menschheit＞＜善行 Wohltun＞」
- (12) クラウディオ・マグリス（鈴木隆雄、藤井忠、村山雅人訳）『オーストリア文学とハプスブルク神話』（書肆風の薔薇 1990）161 頁。
- (13) 『兄弟争い』では「天高くに秩序は住み、その住処もある。この地上には虚しい野望と混乱があるのみ。」（V. 428f.）と語られる。また、『ユダヤ女』に次のような詩行がある。「神の御言葉、神自らが作った聖なる秩序が、不正を働いた者の死を要求するとき、たとい人がおののこうとも、神は自らが創った人間の命を惜しまないものなのだ。」（V. 1236-39）Franz Grillparzer, Anm. 4, S. 391 u. 530.
- (14) <レヒト（Recht）>の概念については拙論参照。阿部雄一「正義のための悲劇——グリルパルツァーが『金羊皮』にこめた意味——」日本独文学会『ドイツ文学』第 133 号（2007）41-54 頁。当該箇所は 48-49 頁、注 21。
- (15) 日記 4066 番、1852 年。HKA, Bd. 11, S. 232f.
- (16) マグリス、前掲書、169 頁。
- (17) Duden Deutsches Universalwörterbuch. Hrsg. u. bearb. vom Wissenschaftlichen Rat und den Mitarbeitern der Dudenredaktion. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich³ 1996.

„Libussa“ – Grillparzers Apokalypse –

Yuichi ABE^{*1}

————— Synopsis —————

Grillparzer hinterließ drei Dramen: „Libussa“, „Ein Bruderzwist in Habsburg“ und „Die Jüdin von Toledo“. Die gemeinsamen Themen sind: Religion und Glaube, das Recht und die österreichische Gesellschaft im 19. Jahrhundert. Die Kernpunkte der Stücke sind jedoch verschieden. „Ein Bruderzwist in Habsburg“ ist ein Geschichtsdrama, in dem über die Staatsform debattiert und es überlegt wird, wie Österreich das 19. Jahrhundert überleben kann. In der „Jüdin von Toledo“ wird das individuelle Innere erforscht und das Streben nach der Selbstrealisierung und deren Scheitern werden ausgedrückt. Der Kernpunkt der „Libussa“ ist, den Menschen und seine Welt in Umrissen zu zeichnen. Und es ist die Aufgabe des vorliegenden Aufsatzes, die Art und Weise, wie sie umrissen sind, zu erwägen, um den Gedanken Grillparzers richtig zu verstehen.

Grillparzer hat den Schöpfungsmythos der Libussa radikal zu seinem Dramenstück umgearbeitet. Im 1. Akt trifft Libussa Primislaus, überschreitet von ihrer sozusagen himmlischen Sphäre die Grenze und geht in die Menschenwelt hinein. Durch die Zwischenakte hindurch stellt Grillparzer heraus, daß der Übergang vom Matriarchat zum Patriarchat der Anfang der Geschichte ist, und zwar anhand des Genders als Grundfrage der menschlichen Gesellschaft. Anlaß zum Übergang gibt, daß jedermann sein eigenes Recht behauptet und das Prinzip der Frauenherrschaft „das kindliche Vertraun“ nicht mehr aufrechtzuerhalten ist. Unter diesen Verhältnissen beginnt die menschliche Geschichte, in der der Mann die substantielle Macht ergreift.

Als Ansatz des neuen Anfangs will Primislaus die Stadt Prag gründen und Libussa den Segen darüber sprechen lassen. Weil sie aber ihre ehemaligen hellseherischen Kräfte wiedergewinnt, prophezeit sie wider Willen die Geschichte der menschlichen Albträume, die sich ununterbrochen folgen. Die Prophezeiung aber ist, vom 19. Jahrhundert gesehen, eine vergangene Geschichte. Der Ausgangspunkt ist deshalb die Zeit von Karl V., weil die Reformation der wichtigste Wendepunkt der Geschichte für Grillparzer ist. Seines Erachtens hat Luther verhindert, daß das Christentum eine ehrwürdige Gewohnheit für die Bildungszeit wurde, und die Ehrfurcht ist deswegen allmählich verlorengegangen. Je schwächer die Ehrfurcht wird, desto stärker wird man von menschlichen Ambitionen ergriffen und jagt dem menschlichen Glück nach. In diesem Prozeß sieht Grillparzer das menschliche Schicksal. Und die menschliche Geschichte ist also für ihn nichts als der Prozeß, wie die Ehrfurcht verlorengeht.

Zum Schluß des Dramas wird eine leise Hoffnung erwähnt, daß der Mensch am Ende „Demut“ als Gott bekommt und in die Zeit der Libussa zurückgeht. Grillparzer läßt, wie es scheint, vorläufig die Wahrsagerin sagen, man soll nicht daran zweifeln, daß es realisiert werden kann, sondern es gilt daran zu glauben. Indem er auf die Vergangenheit der Menschheit zurückblickt und dadurch zugleich die Zukunft voraussieht, hat Grillparzer aus dem Libussa-Stoff seine Apokalypse gemacht, in der das Endziel für die Menschheit gezeigt ist.

————— Key words —————

Mythos und Geschichte, Matriarchat und Patriarchat, Recht, Glaube und Ehrfurcht

^{*1} Faculty of Liberal Arts Nihonbashi Gakkan University